問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、小野篁（注）といひける人、愛宕寺（注）を造りて、其の寺の料に鋳師をもつて鐘を鋳させたりけるに、鋳師がいはく、「この鐘をば、つく人もなくて（つく人がいなくても）、十二時（注）に鳴らさむ（鳴るようにつくりました）とするなりけり。それを土に掘り埋みて、三年有らしむべきなり（そのままにしておく）。今日より始めて三年に満てらむ（ちょうど三年たった日）日の、その明けむ日、掘り出すべきなり。それを、あるいは日を足らしめず（日数が足りずに）、あるいは日を余りて（日数を過ぎて）掘り開けたらむには、つく人もなくて十二時に鳴る事は、あるべからず。[1]しかる構へをしたるなり。」と言ひて、鋳師は返り去りにけり。

さて、その後、土に掘り埋みてけるに、別当（注）にて有りける法師、二年を過ぎて、三年といふに、未だその日にも至らざりけるに、え待ち得ずして（待つことができなくて）、心もとなかりける（気になった）ままに、いふかひなく（あさはかにも）、掘り開きてけり。しかれば、つく人もなくて十二時に鳴る事はなくて、[2]ただ有る鐘にて有るなりけり。「鋳師の言ひけむ様に、その日掘り出したらましかば（決められた日に掘り出したならば）、つく人もなくて十二時に鳴りなまし（鳴ったであろうに）。さ鳴らましかば（そのように鳴ったならば）、鐘の音の聞き及ばむ所には時をも確かに知り、めでたからまし（すばらしかっただろうに）。いみじく口惜しき（つまらない）事したる別当なり。」とてなむそ[3]の時の人言ひそしりける。

（注）小野篁＝平安時代の歌人、詩人。
愛宕寺＝現在の京都府京都市に位置する寺。
十二時＝二時間ごと。
別当＝寺で事務を行う人。

（「今昔物語集」から。）

(ア)　――線1「しかる構へをしたるなり。」の「構へ」は「仕掛け」という意味であるが、「鋳師」が行った仕掛けとはどのようなことか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1　鋳たあとに土の中に埋めておいた鐘をちょうど三年たった日の翌日に掘り出せば、つく人がいなくてもその鐘は二時間ごとに毎回音を鳴らすようになっているということ。
2　この鐘は二時間ごとに誰かがついておかないと鳴らなくなってしまうので、もし鳴らなくなったら土に埋めてちょうど三年後の翌日に掘り返せば、元通りに鳴る鐘に戻るということ。
3　きれいな音が鳴る鐘になるためには鋳たあとに土の中でちょうど三年間と一日埋めておく必要があるので、二時間ごとに土の中で鐘が鳴っても掘り出してはいけないということ。
4　三年かけて丁寧に鐘を鋳てきたが、さらに今日からちょうど三年間と一日その鐘を埋めておけば、人がつかなくても不思議と二時間ごとに鐘が鳴るようになっているということ。

(イ) ――線2「ただ有る鐘にて有るなりけり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1　鐘を土に埋めて二年たったときに、「別当」は本当に特別な鐘なのかと疑問をもち、こっそり掘り出して鳴らしたところ鐘は音を出さなかった。

2　鐘を土に埋めてから三年が過ぎる前に、「別当」が鐘を土の中から掘り出してしまったので、他のものと変わらないただの鐘になってしまった。

3　「鋳師」が土を掘って鐘を埋めたが、そのあと「別当」が様子を見ようとすぐに掘り出してしまったので、二年たったときにただの鐘になっていた。

4　鐘を土に埋めて三年が過ぎても「鋳師」が現れなかったので、「別当」が代わりに鐘を掘り出そうとしたものの、鐘はまったく別の形になっていた。

(ウ) ――線3「その時の人言ひそしりける。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1　せっかく「鋳師」に頼んで特別な鐘を鋳てもらったのに、「別当」によって鐘は正確に時刻を鳴らすことができなくなり、人々の暮らしは大きく変わってしまったから。

2　せっかく「鋳師」に鐘を鋳てもらったのに特別な鐘にならなかったので、正確に時刻を知ることができないことに責任を感じた「別当」が逃げ出してしまったから。

3　「鋳師」の意図する特別な鐘になっていれば、人々が鐘の聞こえる所に集まってきてにぎやかな町になったはずだったが、「別当」がその期待を裏切ってしまったから。

4　「鋳師」がつくろうとした特別な鐘になっていれば、鐘の音が聞こえる所では確実に時間がわかりすばらしいことだったが、「別当」がそれを台無しにしてしまったから。

(エ) 本文の内容に一致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1　「小野篁」という人は、愛宕寺を建てたときに「鋳師」から鐘をつくった方がよいと言われ、「別当」に相談して悩んだ末に、仕掛けのある特別な鐘をつくろうと決意した。

2　「小野篁」は愛宕寺で使うための鐘を「鋳師」に鋳させたところ、「鋳師」は鐘に仕掛けをし、その仕掛けが作動するための内容を告げ、その鐘を土に埋める前に去っていった。

3　鐘をつくった「鋳師」が三年間鐘を掘り出さないようにと手紙に書き残していたが、「別当」はそれを無視し、「小野篁」の忠告も聞かずに鐘を掘り出してしまった。

4　「鋳師」がつくった愛宕寺の鐘の仕掛けは複雑であり、「小野篁」は理解できたものの「別当」はよく理解できず、「別当」はその仕掛けを別の仕掛けにつくり変えてしまった。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、山科(注)の道づらに、四(注)の宮河原といふ所にて、袖くらべ(注)といふ商人集まる所あり。その辺の下(注)種なる男ありける、地蔵菩薩を一体造り奉りたりけるを、開眼(注)もせで櫃(注)にうち入れて奥の部屋など思し(お造り申し上げたのを)き所に納め置きて、世の営み(日々の忙しい暮らし)に紛れてほど経(日日がたったが)にければ、[1]忘れにけるほどに、三、四年ばかり過ぎにけり。

ある夜、男の夢に、大路(大通り)を過ぐる者の声高に人呼ぶ声のしければ、男、「何事ぞ。」と聞けば、「地蔵こそ。(お地蔵さん)」と、声高にこの家の前にて呼ぶなれば、奥の方より、「何事ぞ。」と答ふる地蔵の声すなり。「明日天帝釈(注)の地蔵会し給ふには参らせ給はぬか。(いらっしゃいませんか)」と言へば、家の奥より、地蔵、「[2]参らむと思へど、まだ目のあかねば、え参るまじく。」と言へば、「構へて(必ず)参り給へ。」と言へば、「目も見えねば、いかでか参らむ。(どうして行くことができるだろうか)」と言ふ声すなり。うちおどろきて(ふと目が覚めて)、何のかくは夢に見えつるにかと(いったいどうしてこのような夢を見たのか)思ふに、あやしくて(不思議で)、[3]夜明けて奥の方をよくよく見れば、この地蔵納め置き奉りたりけるを思ひ出して、見出したりけり。男、「これが夢に見え給ふにこそ。」とおどろき思ひて、急ぎ開眼し奉りけりとなむ。

（「宇治拾遺物語」から。）

（注）山科の道づら＝山科へ向かう道の途中。山科は、現在の京都府京都市山科区。
四の宮河原＝山科を流れる四ノ宮川付近の河原。
袖くらべ＝かつて商人たちは袖の中で指を使って商品の値段の交渉をしていたことから、商人たちの集まる所を指すようになった。
下種＝身分の低い者。
開眼＝新しく造られた仏像などに魂を入れる儀式。
櫃＝ふたのついた箱。
天帝釈の地蔵会＝仏教における守護神の一つである帝釈天をまつる、お盆の頃の行事。

(ア) ――線1「忘れにけるほどに」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「男」は、地蔵菩薩を一体造ったあとで、開眼をしておきながらも奥の部屋と思われる所にしまい、表に出すことを忘れていた。

2 「男」は、造ってもらった一体の地蔵菩薩を受け取ったが、開眼をしたあとで奥の部屋と思われる所にしまったことを忘れていた。

3 「男」は、地蔵菩薩を一体造ったものの、奥の部屋と思われる所にずっとしまったままで、開眼することを忘れてしまっていた。

4 「男」は、一体の地蔵菩薩を造ってもらい、奥の部屋と思われる所にしまっていたが、その地蔵菩薩を置いた場所を忘れてしまった。

(イ) ――線2「参らむと思へど、まだ目のあかねば、え参るまじく。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 行きたいと思うのだが、まだ目があかないので、行けそうにない。

2 行きたいとは思わないが、まだ目があかないうちは、行かない方がいい。

3 行きたいと思うけれど、まだ人の目があるので、今は行くべきではない。

4 行きたいと思うかもしれないけれど、まだ人の目を気にしなければならない。

(ウ) ――線3「夜明けて奥の方をよくよく見れば」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「男」は、奥の部屋で寝ていたところ、夢の中で「大路を過ぐる者」が大きな声で自分を呼ぶのを聞いて目が覚めたから。

2 「男」は、長い間奥の部屋に入ることはなかったが、ふとそこに入ってみると地蔵菩薩があることに気がついたから。

3 「男」は、奥の部屋にしまっていたはずの地蔵菩薩と「大路を過ぐる者」が、自分に話しかけてきたという夢を見たから。

4 「男」は、奥の部屋に長い間しまっておいたままの地蔵菩薩が、地蔵会のことについて話をしているという夢を見たから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「男」が袖くらべを行っている商人の横を通り過ぎていったのは、山科から戻る途中の四の宮河原という所であった。

2 「男」は一体の地蔵菩薩を箱の中に入れておき、日々の暮らしの忙しさから、そのまま三、四年くらいが過ぎてしまっていた。

3 「大路を過ぐる者」は、天帝釈の地蔵会が行われる前に、「男」の家の前に立って地蔵菩薩に呼びかけ、その地蔵菩薩を拝んだ。

4 「男」は、夢から目が覚めて空が明るくなった頃に奥の部屋をよく探したところ、開眼している地蔵菩薩を見つけた。